

月、教え子の結婚式・案内状が届いていたが、中止を告げられた。四〜八月、会合・研究会・温泉の旅・祭見学・フィールドワークなどすべて中止。九月、氏神さまの例大祭中止…。

同月、義弟の葬儀（千葉・市川市）、十月、納骨。十一月、母の七回忌の法事（東京・大田区）。親しい方の死の知らせは届かなかった。コロナ禍状況下の衣食住、冠婚葬祭にふれてはきたが、心の準備が伴っていないことに気づかされた。新たな民俗の始まりに遭遇し、戸惑っている自身がいたのだった。

コロナ自殺、コロナ児童虐待、コロナDV、コロナ離婚、コロナ生活困窮者、コロナ退学（大学）が急増しているという。周辺を見渡すと大方の人は長期戦にのんびり構えてはいるが、ほんの一部は殺気立っている。コロナ犯罪も続いている。

東京・品川、荏原町商店街振興組合は、商店街に立て看板を立てている。（みんなが不安なんです。）（批判でなく応援&助け合いで！）（*長引く状況下での疲弊とともに不安と恐怖心ありますよね。誹謗中傷などでコロナでない被害も拡大防止にご協力くださいませ。）というものであった。（人を傷つけるのではなく思いやる）ことの大切さをさまざまな分野から発信し続けている。

コロナ禍の困難な状況のなかであるからこそ、できることやろうと「研究ノート」執筆を決意した。しかし、未だに新しい生活様式は見えてこない。図書館や都心の書店には行けずにいる。切り抜きは『東京新聞』に限定されている。書籍、テレビ、ラジオ、ネットまでは手が伸びていない。現段階は資料の収集・

分類・整理の入り口程度の提示に過ぎない。「ハナシの発生・笑い全般」「なぞ掛け」は割愛した。別の機会に譲りたい。

引用・参考文献

- 『米屋陽一 民話・伝承研究室通信』第41号〜46号（二〇二〇年五月号〜十月号）米屋陽一 民話・伝承研究室
- 『東京新聞』二〇二〇年五月〜十月 中日新聞東京本社
- 拙稿「疱瘡除けを願い 昔話に託した民の心」「大人が読みたい昔話」二〇二二年 三栄
- 拙稿「伝承の魅力―民話・絵本語りの文学史―」『今だから読みたい昔話』二〇二〇年 三栄
- 拙稿「近世の赤本から近代の赤本へ―疱瘡除けの願いを中心に―」、第二回インド・日本比較文化研究セミナー（インド・ジャワハルラー・ネルー大学・二〇一四年）講演（草稿）

追記 JTB総合研究所は、二〇二〇年三月二十六日〜二十九日、「アマビエに関する調査」（インターネットアンケート調査）を実施し、二九七四サンプルを得た。河野まゆ子主席研究員は（アマビエアームにみる「伝承」の価値）として分析・発信（四月十五日更新）している。NHKテレビ〈視点・論点〉でも放送された。『東京新聞』は（アマビエ江戸後期のフェイクニュース？）（売るため瓦版屋が創作か）（熊本には該当の伝承なし）の見出しを掲げ詳述している。（二〇二二年二月三日付夕刊）

（よねや・よういち／日本民話の会）

【緊急特集】 新型コロナウィルス流行と口承文芸研究

千葉県市川市の〈病疫伝承〉と二〇二〇年の伝承動態

根岸 英之

はじめに

世界的に新型コロナウィルスが流行し、千葉県市川市でも、二〇二〇年二月にスポーツクラブ利用者から県内初の陽性者クラスターが報告され、公共施設の利用やイベントなどの多くが制限される時期が続いた。かつての人々も、現在の我々が「科学的」と見做すものとは違う術で、病疫に対処してきたのだから。それは口承文芸のなから、〈病疫伝承〉として読み解くことができるものと考ええる。

本稿では、市川市の〈病疫伝承〉を紹介するとともに、二〇二〇年の市川でのアマビエの流行状況と、私の所属する市川民話の会の活動を報告することにより、まだ決定的な治療法が見当たらない状況下において、コロナと共生していくこれからの生活の在りようを見つめなおす縁よすがとしたい。

一．病を治す桜の霊場・妙正大明神

― 北方町・妙正寺の霊験 ―

北方町千足の妙正寺は、昔は重く恐ろしい病とされた「疱瘡」(ウイルスによる感染症である天然痘)にご利益のある寺として信仰されてきた。いく通りかの語られ方があるが、ここでは、寺の縁起に基づいて紹介する。

鎌倉時代、日蓮聖人が若宮の法華堂で百日説法をしたとき、千足池の主は老婦の姿となつて通い、満日に次のように所望する。

（先の老婦大聖人に本尊及法号並に法華経一部八軸を賜らん事を希ふ。且つ大聖人に述べて曰く、「我必ず当に末世の児童を守護すべし」と。斯く誓ひしかば、大聖人直に「疱瘡守護の誓約、妙正に授与するなり」と記したる曼陀羅を与へ、名を「妙正」と授け、八軸の法華経を賜ふ。）（宗祖櫻之霊場縁起）刊行

年不明より)⁽¹⁾

老婦は七軸の法華経は帰路の途中に置き、八巻目は池のほとりに、曼陀羅は池に臨む桜の枝に掛け、池に忽然と姿を消した。池のそばに社を構え妙正大明神と崇めるようになったのが、妙正寺の縁起とされる。

江戸時代には、次のような出来事が縁起として伝わっている。
〔明暦年間同国印旛郡車方村に悪疱瘡流行し、兒女其の大半を失ふ。村民諸神に祈るも更に験なし。皆挙て唯愁き悲むの外無かりき。時に同村の寺僧一心に諸神に村民安全を祈願せしに、一夜靈夢あり。諸神告げて曰く、「汝千足の妙正大明神に祈願し、霊櫻を削りて靈符と為さば、速に悪疾退散村内安全ならん」と。夢覚めし後、直に村人に語るに皆大に欲び馳来りて、妙正大明神に祈念し靈符を得て病者に与へしに、忽ち拭ふが如く村内安全を得たり。其の後経歴三年近郷近村に大悪疾流行し死者堅横なりし時、再び大明神に祈り靈符を以て忽ち安全を得たり。夫れより世人復「櫻之霊場」と号して遠近参拝以て今日に至れり。〕(同前)

車方村は現船橋市。日蓮宗法井寺がある。現在、法井寺の住職は、妙正寺の赤羽浩教元住職のご子息の赤羽文宏氏(昭和四十六年生まれ)が務めておられる。文宏住職の話によれば、法井寺周辺は、かつて神保郷と呼ばれ、中山法華経寺ゆかりの寺が多く建立された地域であった。法井寺は十六世紀後半頃の建立と見られるとのこと。こうした法縁から、この地を発生源

として、妙正大明神が流行神として喧伝されていたものと考えられる。現在、法井寺には妙正大明神が祀られ、地元では「ば神」と呼ばれているという。

妙正大明神は、子どもを守ることから「乳母神」とも称され、柏井町の「姥山」貝塚(国指定史跡)の地名もこれに由来する。こうして、妙正寺では、桜の皮を削った靈符を作り、信仰を集めるようになった。妙正大明神は、市川市内の宮久保の白幡神社(文化九年)、大野町一丁目の八幡神社(文化十一年)、大町の日枝神社(弘化二年)などに石碑が遺されている。大町の道端には大正六年の石碑も建てられており、近代以降も広く信仰されていたことが分かる。⁽²⁾

へびは水にまつわる神聖な生物とされることも多く、妙正大明神も、元は池の主(水神)的な存在であり、そうした民間信仰を日蓮宗が吸収し、今のような形になってきたものと考えられる。常光徹氏は、「法華経の功德を説く一連の竜女成仏譚の系譜につらなる話」と位置付けている。⁽³⁾

桜は、農事に先立って花をつける植物であり、桜の花見は、豊かな農事を願う心意が込められていた。また、葉草としての効能も認められ、皮を煎じて飲むと、腫れ物や風邪、解毒作用などがあるとされる。さらに、鈴木恒男氏は、仏説の「龍華三云(弥勒三云)」という、釈迦入滅後、弥勒菩薩が現れ、龍華樹の下で悟りを開き三會(三度の説法)をして衆生を救うという仏説との関わりを説く。法然上人の師である皇円阿闍梨

は、三會に遭うために長生きであるという蛇体と化して、遠江国の桜の池に住んだという説話が伝わり、謡曲「桜の池」としても知られるようになったとするものである。⁽⁴⁾ 妙正寺の信仰は、そうした桜の持つ力によっても培われてきたものといえよう。

妙正寺には、曼荼羅を持ち蛇の尾をした老婦と、
〔昔より約束なればいもはしか病とも死なじ神垣の内〕

と御神詠の描かれた掛け軸が伝わっている。「いも」は痘瘡(天然痘)のこと。筆者は、この妙正大明神の姿が、「アマビエ」同様、新型コロナウイルス退散のご利益として広まればと秘かに期待していた。今でも、境内には桜が植えられ、市川の隠れた桜スポットとなっている。⁽⁵⁾



妙正寺の掛け軸

二. 村の四隅で災厄を守る辻切り

― 国府台で行われる民俗行事の起源譚 ―

市川で災厄を追い祓うものとして思い浮かべるのは、国府台の「辻切り」(市指定無形民俗文化財)だろう。一月十七日、鎮守の天満宮境内で、ワラの大蛇が四体作られ、村境の四隅に、

顔を外に向けるように木に据えられる。この起源譚として早くに刊行されたものに、平野馨氏の書かれた『房総昔話散歩』所収の話がある。

〔一月十七日大蛇の形を作り、表に「塞座三神」裏に「村内安全」と書いた木札をその首にかけ、四方の村境につるし、神酒を供え村の無病息災を祈る。もと宮中の道饗祭りだったので、室町末期に伝わったといわれる行事。〕⁽⁶⁾

市川民話の会編著『市川のむかし話』は、この説に則して読み物的な再話をしている。

〔今から五百年ほど前のことです。(略) そのころ国を治めていたのは、室町幕府ですが、世の中はたいそう乱れていました。(略) 台風のと国府台付近の村から悪い病気がはやりだしたのです。(略) ひとりのおじいさんが口を開きました。〕

「これは、都からきた坊さんから聞いた話だがな、上方の村々では、大蛇を作って村の四すみにおくそうじゃ。すると、その蛇が、もろもろの悪霊の村にはいるのを防いでくれるのだそう。何でもこれは、都の天子さまのご殿からはじまったことなのだそうじゃ。毎年六月と十二月に『ミチアエの祭』といって、ご殿の四すみに悪霊を集めて、ごちそうを供えて食べさせたいえで、追い返す儀式じゃと。それが、だんだん変わって大蛇になったんだそう。ひとつこの村でもやってみたらどうじゃらう。』⁽⁷⁾

時代設定を室町幕府の治めていた時代とし、村の古老が「都

からきた坊さんから聞いた話」として、「ミチアエの祭」を起源とする大蛇作りを国府台で始めようと促す展開になっている。再話としては、よくできた趣向といえよう。ところが、「辻切り」を市指定無形文化財（指定は一九七九年）とするべく調査された報告書では、起源については不明としている。

（この行事は、もともと宮廷に行われていた「道饗祭（ミチアエノマツリ）（6月と12月に皇居の四隅に疫神を誘い、食物を与えて追い払う祭り）が、次第に形をかえて民間にひろがったものである。人畜に害を与える悪霊や悪疫の最もはいりやすいと考えられていた部落の四隅の大蛇をおいて、外から侵入してく目に見えない悪霊を、蛇神によって追い払おうという呪術である。

残念なことに、この行事がいつの時代からこの地域で行われるようになったのとは不明である。⁽⁸⁾

これは、平野氏の書かれた昭和三十七年頃には、国府台に「室町末期に伝わった」と伝承されていたのが、報告書段階では確認できなくなったのである。民俗学的一般論としては、平野氏の記述は、宮廷儀礼から民間習俗として伝わったのが「室町末期」と言及したものと捉えるほうが妥当かと思われる。

辻切りの行事は、しめ縄やしめ飾りと同じように、霊力のありと見做されてきた大蛇により結界を作り、目に見えないものの侵入を防ぐという信仰に基づくものといえよう。市川市内では、堀之内に現存するほか、根本などでも行われていた。千葉

いう。さらに吾末永く郷民を火難水難より守護せんと誓願を立てて、海辺より貝殻を集め、これを浄めて法華経を書写し土中に並べしき、この上に端座定（生き乍ら座禅をして火葬になる事）に入り人柱に入り給うと言う。⁽⁹⁾

宝永年間（一七〇四—一七二〇）に悪疫などが流行したため、貝殻に「法華経」を書いて埋めたとある。敷地には、元禄十年（一六九七）の法華経写塔が建ち、年号にずれがある。行徳の馬光という名主級の者が書いたとされる地誌『葛飾誌略』文化七年（一八一〇）では、元禄年間に水難除けのために大般若経を書いたと記される。

〈経塚 海浜に有り。中頃（マ）自潭和尚大般若を書いて、水難除け祈禱に築きしといふ。川幅五間ばかり。元禄御繩入後（二七〇二）開之といふ。利根川の枝川也。⁽¹⁰⁾

新井寺は曹洞宗であり、大般若経の方が宗派として適っているように思われるが、新井寺のホームページでは、次のように記されている。

〈慈潭和尚様は、貝殻ひとつひとつに一字ずつの般若心経一巻、法華経八巻を書写し、地中に埋め、御自ら火定に入られたとされています。〉

〈また、現在、秋葉三尺防火坊大祭で転読されている『大般若波羅蜜多経六・百巻』（手書き）は、慈潭和尚様が寄附を募って経本を調製、苦心の末、書写されたものと伝えられます。〉⁽¹¹⁾

鈴木和明氏によれば、元禄十年の法華経写塔には、「為妙栄信

県内でも、下総地域、上総地域、安房地域とそれぞれ形状を異にするが、広く行われていることが分かる。⁽¹⁰⁾

こうしたことを考慮すると、室町末期以降、民間習俗化した辻切りが、江戸時代にかけて村落社会が整えられていくなかで、国府台を含む下総一帯に伝播してきたものと考えられるのが穏当であろう。発祥のはっきりしない行事起源譚をハナシとして伝えていくことは、誤った伝承を定着化させる可能性のあることを意識しつつ、絶えず研究を進めながら行うことの重要性を再認識させるものである。⁽¹¹⁾

三．御経塚とコレラ

—新井に伝わる江戸時代の伝承と現在へのつながり—

御経塚は江戸時代、新井（あらい）の新井寺（しんせいじ）の慈潭和尚が、相次ぐ水害や地震、飢饉や疫病でさまざまな村人を救おうと、貝殻に経文を書いて埋めたと伝える伝承である。行徳バイパスの近くに遺された塚の由来記には、次のように記されている。

（今を去ること、二六〇余年前、宝永年間当地一帯は、凶作飢饉あいつぎ悪疫流行し、為に人心麻のごとく乱れ、世相混乱の極に達せり、時に秋葉山新井寺四世慈潭禪師座視するに忍びず、三七、廿一日間の断食祈願の禪定に入る。即ち、観世音菩薩の靈験ありて、観世音の化身秋葉権現を遠州より勧請し新井寺境内に奉祀し大いに教化につとめた。たたえて慈潭禪師を生仏と

女也」と女性の名前が刻まれており、慈潭和尚との関係はよく分からないとする一方、新井の旧家に、宝永三年（一七〇六）の日付と慈潭和尚の名前と判が押された経箱が伝わっているという。⁽¹⁰⁾

これらを重ね合わせると、元禄年間から宝永年間にかけて、慈潭和尚が何らかの経を貝殻に書いて塚を築いたことが骨子としてあり、あとは、それぞれの時代の解釈によって、合理化が図られてきたものと考えられる。本論では、〈病疫伝承〉を切り口に取り上げているので、由来記の「凶作飢饉あいつぎ悪疫流行し」の文言に注目するが、「火難水難」という〈災害伝承〉として位置付けることも、当然ながらできるものである。⁽¹⁶⁾

とはいえ、この御経塚の近代以降の関わりを視野に入れると、やはり〈病疫伝承〉として捉えることの有用性が見えてくる。明治から大正期に流行したコレラの話が流行すると、こんなエピソードが展開したのである。

〈明治から大正期にかけて、幾度かコレラが浦安の堀江・猫実（ねこじね）に蔓延したことがある。このときこの経貝がコレラに効くという噂が広まり、大評判になって、浦安から大勢の人びとが御経塚の経貝を掘りにやってきたことがあった。もとより、貝殻にはコレラ菌に対する殺菌作用はなく迷信なのだが、あらかた掘りつくされてしまった（略）。浦安にコレラが多発したのは、水運の便に恵まれ、東京との往来が頻繁すぎて、（略）すぐに伝播してきたこと、住民の一部に、洗濯などの生活廃水が流れる境

川の水を飲料水に利用する者がいたことなどがあげられている。(略) コロリと言われて恐れられ、浦安の町中がコレラノイローゼになったとしても不思議ではない。御経塚の経貝も、そんな浦安住民の不安な気持ちを鎮静させる効果はあったのだろう。(17)

〈コレラ患者の出た家の周囲には、警察官が縄を張って五、二十日間ほど家族の外出を禁止し、食べ物や差し入れしました。警察官は二十四時間の立ち番をして警戒しました。(略) 境川や船以川などの水を飲むことを禁止し、その代わりに、新井村の対岸の下今井村にあった「おくまん出し」という場所から、江戸川の水を汲んできて町民に配りました。(略) 浦安町や南行徳村では、亡くなった人や重症の患者を、町役場、村役場、学校、神社、お寺などの建物に収容していましたが、衛生状態はともひどいものでした。そこで、一九二二年(大正元年)十一月八日、当代島と新井の境界に、浦安町と南行徳村が資金を出し合って、「浦安町・南行徳村組合立伝染病舎」(別称 避病院)を作りしました。当時、行徳では「ひ」を「し」と訛りましたので、俗称を「死」病院とっていて、そこへ入院すると生きて出られないと嫌い、かえって病気が蔓延することがありました。(18)

この病舎が、現在の東京ベイ・浦安市川医療センターで、「第二種感染症指定医療機関」として、新型コロナウイルス感染症の患者も受け入れている。(病疫伝承)という視点を持つことにより、江戸時代の御経塚から、現在の新型コロナウイルスまで

あったかということはいっさい示されていない。それは逆にいうと、流されることに意味があったからで、その理由はたんに重い病気ということだけで十分だったのである。貴種流離譚としての条件は流される(あるいは流浪する)ことにあるからである。(21)

筆者も今回、改めて伝承を見直してみても、鈴木氏の指摘を重く受け止めたことである。特定の病気を想起させる方が、聴き手には理解しやすくなるのは事実であろう。しかし、限定したイメージにしてしまっているか、ここでは、あえて再話の問題として提起しておく。

2 北方の七面堂

鈴木氏はまた、次のような事例を紹介している。

〈妙正庵の南の、北方の中心地域——先にも触れた法見寺の脇にある七面堂もその一つで、その姿は女神蛇体だという。(略) この七面さんもまた安産子安の信仰が厚い。(略) 明治初年に疫病がはやってきたとき、七面堂のゴクウテン(御宮殿)をお神輿のようにかついで村中を廻ったところ治ったとも言う(萩原法子氏採録)。(22)

3 国分日枝神社のアンバさま

萩原法子氏の『いちかわ民俗誌』には、市川北部で行われているアンバ講(大杉講)について、詳述されている。

の関わりがたどれる点が興味深いといえないだろうか。(19)

四. その他の〈病疫伝承〉

1 安楽寺の常盤井姫

奉免町の安楽寺は、妙正寺と同じく、日蓮聖人の百日説法により帰依した女性の伝説である。鎌倉時代、後深草天皇の皇女常盤井姫は不治の病にかかり、乳母とともに舟で奉免に流れ着いた。聖人の力で病は癒え、帰依して日蓮宗初の尼寺となったとされる。古くの記事類では、どのような病か描写がないが、市川民話の会編著『市川のむかし話』では、次のような描写を採り入れている。

〈おひめさまは、うすぎぬをかぶっていらつしやいましたが、そのすけて見えたお顔を見て村人は「あつ。」と声をあげました。(略) 村人は見たのです。おひめさまの、ぶつぶつの、できものだらけのお顔を……。 (略) 常盤井の宮は、その時代ではなおらないといわれる病気にかかって、美しかったお顔にみくいで、きものができたことをかなしんでいらつしやいました。(20)

ここでは、治らない皮膚の病を想起させる。語り手や聴き手は、あるいは天然痘やらい(ハンセン病)などをイメージするかもしれない。鈴木恒男氏は次のように指摘する。

〈奉免の場合も宮久保の場合も流されなければならぬほどの病であったという理由、たとえば足腰が立たなかつたとか疫病であつたという理由、主に関東と東北の一部に分布する信仰で、阿波(茨城県桜川村―引用者注)にある大杉神社がその発祥の地とされている。昔、この地にほうそうが流行した時、大和の三輪明神を勧請して祀つたところ、疫病がなくなつたということから、疫病除けの神として急速に信仰が広がった。市川北部、堀之内(現北国分町)や国分には、村の代表が大杉神社へ代参に行き、いただいできたお札を皆に配るという代参講の形で、アンバ講が続いている。(略) 国分では二月十一日、日枝神社拝殿に三メートル程の舟を出し、中央に杉の木を立て、五色のしでを垂らし、天狗面を二面飾る。昔は舟をみこしのようにかっいで、はやしながら氏子の家を全部回つたそうだが、今は舟の前に神事があるだけである。(23)

4 大野町の疱瘡神

『市川市史民俗編』は、従来あまり取り上げられていなかった事例についても調査し、紹介している。

〈日蓮宗法蓮寺(大野町四丁目)の山門の外には一九七五(昭和五十)年頃まで疱瘡神の小祠が建っていた。(略) ご神体のみ法蓮寺祖師堂にうつされ、鬼子母神と併祀されるようになった。祠が山門の外にあつたころは、(略) 疱瘡にかかると人に見られてはいけないといつて、その家族が夜な夜なこっそりこの祠に参つていたという。その際、疱瘡神には赤いものが良いということで赤い供物を供えた。(略) 旧大柏村地区の五か寺(略)を

現在「カシワの守」と呼び、スタンブラリーのチラシを作成し配っている。このチラシには法蓮寺について「疱瘡神のお寺」と書かれており、また「新型インフルエンザ予防のお寺」とうたっている。(略) 毎年一月十五日に殿台の主婦が法蓮寺の祖師堂に寄り集って、疱瘡オビシヤ(別名ウラオビシヤ、団子オビシヤ)を行っている。(略) 団子をプラスチックパックに入れて持ち帰り、家できな粉をかけるなどして食べる。この団子を食べると一年間病気せず、家に疫病が来ないという。(24)

5 はしかのまじないに橋くぐり

『市川の伝承民話』には、八幡と平田のムラ境と国道十四号線が交差する衣川(現在は道路と暗渠)にかつてかかっていた橋の下を、はしか除けに潜るまじないが記録されている。採話したのは昭和六十年代前半ころであり、昭和十年代前半ころのことと思われる。

〈そこに橋がかかっていた、その下を歩けたんです。いま五十年になる娘が生まれた頃は、はしかが軽くすむようにというまじないのために、橋くぐりといって橋の下をくぐったもんです。橋の上から水がしたしたと落ちていって濡れないように、頭にものを載せて橋の下をくぐらせた。きれいな清水が流れていました。(話 林 かね・八幡)〉

6 湊新田の花火

『市川の伝承民話』には、今では宅地化が進み大がかりな花火は上げられなくなったが、湊新田の花火にまつわるハナシが伝わっている。

〈七月十四日にあつてね。むかしからいわれがあのよ。悪い病い、流行んないようにやるのよね。一年やらない年があつたんだつて。警察が許可しなかったから。そしたら、大おこりが流行つたんだつて。それで、その許可しなかったおまわりさんが、一番はじめに死んじゃつた。(略) ものすごかつたつてきいたよ。笹の葉におもちつけるの。(略) 家でも、はしかやつて、コンコンコンコン咳止まんないの。(略) 煎じた笹にもちつけて、キンカン入れて氷砂糖入れてね。土瓶でね、煎じるのね。それ飲ましたら、ピツタリ止まっちゃつたよ。それから、笹だんごつてありがたいなあとと思うの。(話 湊老人会の皆様・湊新田)〉

7 破傷風と古戦場

『市川の伝承民話』には、中山辺りは戦国時代の古戦場で、そのため、破傷風になりやすいというハナシが記録されている。

〈昔、市川でも、特別に破傷風にかかる人が多い所があつたんですつて。破傷風というと、畑なんかして、傷口から土のバイキンが入ると、背中なんかそつて背骨が折れるみたいな病気なんですよ。痛くて、苦しんで死んでしまふんです。それで、変だ

ということ、そのあたりの土を掘りかえしたら、刀傷のある人骨が出たつていいですよ。古戦場だつたんですね。(記録 和爾 貴美子)〉

8 中山競馬場で馬の採血に従事した勤労働員生

市川市に隣接する船橋市には、中山競馬場があつたが、一九四三年(昭和十八)を最後に競馬は中止され、軍馬を育成する場所になった。翌年には「陸軍軍医学校中山出張所」が設けられ、一九四五年四月、「本土決戦に備えて10万リットルのガス壊疽のための血清を製造せよ」という命令が下つた。「ガス壊疽」とは、傷口にばい菌が付着して筋肉が腐り、ガスを発生し悪臭を放つて、死に至る恐ろしい病気である。本土決戦となれば、多数の負傷者が出る可能性があるため、治療するための血清が多量に必要とされた。馬にガス壊疽菌を注射して抗体を作り、血を抜き取つて血清を製造する。採血作業に当たつたのは、授業も停止され、お国のために働くことを命じられた勤労働員の私立市川中学校(現在の市川学園)や船橋中学校(現在の船橋高校)、船橋高等女学校(現在の東葉高校)の生徒たちだった。以下は、佐野より子さん(一九三二・昭和六年生まれ)の体験談である。

〈菌を注射し、血清が製造できると判断された馬は広い所へ連れ出されました。男子がロープで脚を縛り、横倒しにするんです。軍医が動脈を切つて金属製のT字管を挿入し、わたしたち女子が、

流れ出る血を次々とシリンドラーに注いでいくんです。最初は、生暖かくなるのが気持ち悪く感じましたが、そのうち慣れていきました。作業は終戦の8月15日の午前中まで行われました。本場に戦地の兵隊さんに送り届けられたのか、疑問です。〉

五. アマビエー市川の町なかにも出現

さて、二〇二〇年に時を戻そう。「アマビエ」は、新型コロナウイルスの流行した二〇二〇年二月、掛け軸店がTwitterで瓦版のことを紹介したところ、全国に広まるようになったとされる。

市川市出身のイラストレーターで、チーバくんやスイカのデザインでも知られる坂崎千春氏は、四月三日に、スイカを持つたペンギンを「Twitter」にアップしている。市内の大きなショッピングモールであるニッケコルトンプラザも、専門店閉鎖期間中の四月から五月にかけて、アマビエのイラストをTwitterで募集する企画を行っていた。

同じ頃から、JR市川駅や本八幡駅でも、駅員の毛筆によるイラストや標語の書かれた模造紙が、旅行ポスターの替わりに掲示されるようになった。市川駅では、利用者アマビエのぬり絵を描いて



坂崎千春氏 Twitterより



本八幡駅のアマビエ



市川駅のアマビエ

もらい、それを貼り出す参加型の企画も見られた。

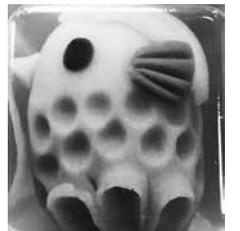
八幡の葛飾八幡宮でも、「疫病退散一日も早い終息をお祈りいたします」と書かれた、アマビエのイラストの入った幟が立てられている。六月三十日の「夏越しの大祓」では、社殿前に茅の輪がしつらえられた。神事は関係者のみで行われたそうだが、アマビエの幟



葛飾八幡宮の茅の輪とアマビエ

と茅の輪が目に入ってくる光景は二〇二〇年ならではのといえるだろう。葛飾八幡宮では、アマビエのぬり絵も配布している。

また、大野町の和菓子店峰月堂では、アマビエの練りきりの和菓子を六月前後に作っていた。小豆が厄除けに用いられていたことにも拠るとのこと。

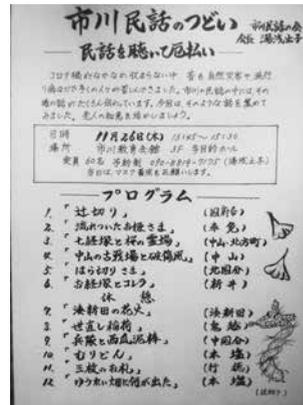


峰月堂 Facebook より

によって病役を乗り越えようとするものと言えるだろう。²⁹⁾

六. 市川民話の会の活動

市川民話の会は、一九七八年(昭和五十三)に発足し活動を続けてきた。二〇二〇年二月十六、十七日のイベントで語りの披露をしたのが、対外的に実施できた最後のイベントで、新型コロナウイルス流行のため、三月から六月まで完全休会となった。発足してから初めての事態である。七月から例会を再開し、感



市川民話のつどいチラシ

染に気を付けながら、活動をしていってほしいのではないかと、十一月二十六日に、定員を制限した事前予約制

の、「市川民話のつどい」民話を聴いて厄ばらい」を開催することが決まった。本稿で取り上げた〈病疫伝承〉を中心としたプログラムとした。会員にとっては、普段は語ることの少ない話に挑戦する機会にもなったといえる。

自粛期間中、取り貯めていた録音資料の翻字や、会員の語った映像を動画サイトにアップすることも考えていたが、時間的制約もあり、実行には至らなかった。映像データのアップも、代替方法といえよう。コレラ禍を経験して、日常的に対面会で話す機会が減ったことを実感した。感染防止に留意しながら、少しでも、対面による「語り」―「聴く」機会を取り戻していくことの必要性を感じている。³⁰⁾

また、本稿で〈病疫伝承〉という視点を提示したように、これまであまり重視して来なかった視点に立って、口承文芸を見直すことも重要であろう。³¹⁾ 新しい伝承様式というものがどのようなものか分からないが、口承文芸の〈記憶〉の堆積性³²⁾に注目して、現在に活かし得る口承文芸研究のありようを探究していきたい³³⁾。

注

- (1) 「宗祖櫻之霊場縁起」刊行年不明 妙正寺
- (2) 「市川市の石造物」二〇〇八 市立市川歴史博物館
- (3) 常光徹「歴史や信仰にまつわる話」『市川市史民俗編―台地・町・海辺の暮らしと伝承―(通巻5)』二〇二〇 市川市

二九二頁

- (4) 鈴木恒男『手児名伝説を追って さまよえる手児名』一九九六 たくみほり工房 一三二〇頁

- (5) 拙稿「文芸からみる市川の自然【82】病を治す桜の霊場・妙正大明神―北方町・妙正寺の霊験―」『みどりのふおーらむ』一七一 二〇二〇年四月号 市川緑の市民フォーラム。なお、船橋市には、古作村の弁天様の池の大蛇を主人公とする異伝が伝わっている。村上昭三『船橋の民話』一九九三 聚海書林 一〇六頁

- (6) 平野馨「昔話めぐり」(初出『朝日新聞・千葉版』昭和三十七年十一月) 高橋在久・平野馨『房総昔話散歩』一九七三 創樹社 一八四頁

- (7) 市川民話の会編著『市川のむかし話』一九八〇 市川民話の会 七六―七八頁

- (8) 『国府台に伝わる辻切りと獅子舞について』一九七五 市川市教育委員会 一一二頁

- (9) 注(8) 二一四頁、萩原法子『いちかわ民俗誌』一九八五 寄書房 六五―六九頁

- (10) 『災い来るな!II―境にこめた願い―』一九九六 千葉県立房総のむら、『災い来るな!III―むら・家・野良 境の諸相―』一九九七 千葉県立房総のむら

- (11) 拙稿「ムラ境に行われる辻切り」『市川よみうり』二〇〇五年一月十四日号

<http://www.ichinyomi.co.jp/oriori/index.html#tt>

- (12) 宮崎長蔵・綿貫喜郎『行徳物語』一九八七 青山書店 九四頁
- (13) 鈴木和明『葛飾誌略』の世界』二〇一五 文芸社 七〇頁
- (14) 「秋葉山新井寺」公式サイト www.shinsei.jp/index.html
- (15) 鈴木和明『郷土読本「行徳塩焼の郷を訪ねて」』二〇一四 文芸社 一〇三―一〇四頁
- (16) 拙稿「災害伝承」を語り継ぐこと―千葉県市川市での実践から―『昔話伝説研究』三三三 二〇一四では、辻切り、御経塚を(災害伝承)の観点から取り上げた
- (17) 注(12) 九四―九五頁
- (18) 注(15) に同じ 二四一―二四二頁
- (19) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【83】新井の御経塚とコレラ―疫病対策の足跡をたどって―『みどりのふおーらむ』一七二 二〇二〇年六月号 市川緑の市民フォーラム
- (20) 注(7) 二〇頁
- (21) 注(4) 二二六―二二七頁。宮久保にも同様の貴女漂着伝説が伝わっている
- (22) 注(4) 二二二頁
- (23) 注(9) 一四〇―一四三頁
- (24) 伊藤伸之輔・石垣絵美「年中行事と人の一生」注(4) 六八―六九頁
- (25) 市川民話の会調査編集『市川の伝承民話』一九九二 市川市教育委員会 三七三頁
- (26) 注(25) 二七七頁

(27) 注(25) 一〇〇―一〇一頁

(28) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【61】市民ミュージカルの光2016―中山競馬場と赤レンガを結ぶ―『みどりのふおーらむ』一四九 二〇一六年八月号 市川緑の市民フォーラム、『第8回いちかわ市民ミュージカル「夏の光2016」空に消えた馬へ」公演プログラム』二〇一六 いちかわ市民ミュージカル実行委員会

(29) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【84】疫病除けの妖獣・アマビエ―市川の町なかにも出現―『みどりのふおーらむ』一七三 二〇二〇年八月号 市川緑の市民フォーラム

(30) 拙稿「コロナ禍で中断した市川民話の会の活動」『伝え』六七 二〇二〇 日本口承文芸学会

(31) 石井正己「新型コロナウイルス感染症の時代と民話」野村敬子・石井正己編著『みんなで育む学びのまち真室川 昔話を未来につなぐ』二〇二〇 瑞木書房、拙稿「へ親子杉」にみる(むがし)と(伝説)と―野村敬子編『真室川の昔話』の「狐むがし」から―同書

(32) 最近の動向として、岩本道弥編著『方法としての(語り)―民俗学をこえて―』二〇二〇 ミネルヴァ書房参照
*インターネットのサイトは二〇二〇年十一月閲覧
(ねぎし・ひでゆき/市川民話の会)

【緊急特集】 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究

疫病をはやらせに来る「二つ目小僧」への対処法

入江 英弥

一 家に近づけないようにする

神奈川県綾瀬市寺尾において、地元の方から次のような話をお聞きしたことがある。

「師走八日はよ、一つ目小僧が帳面持ってきてね」「そこでこんだ悪病をよ、はやらせによ、ありや悪病神だからよ、だから、悪病をな、こんだ赤病でもよ、いわば腸チフスカ、チフスでもよ、ああいうな、病気をよ、はやり病をな、はやらせようとしてんだからよ。」

「下駄や何かを、この外へな、脱けつばなしに置いたりなんかするとよ、そうすると一つ目小僧が師走八日に各家庭を、うちを回って歩いてよ、そこで判を持って、それでそれを下駄なら下駄へ判を押し、それで帳面へ付けてつちまうんだ、な。そうするとそのうちが病気がかかっちゃうわけだ、といういわれなんだ。」

「小僧が来て、入口へ来て見てよ、『あ、こりや、俺の目を、俺は一つつきりつかないけど、たと目があるやつが、いや、あっこにいんな』って思ってた、『ここにはよう付けらんねえ』って言ってた、寄らねえで行っちゃうつてんだよ。」

師走八日に一つ目小僧がやってくる。悪病神で、病気をはやらせようとする。この日に下駄など履き物を出しつばなしにしてあると、各家を回ってきた一つ目小僧がそれに判を押し、持ってきた帳面に付ける。そうすると、病気がかかっちゃう。そこで、この日に一つ目小僧が来ないようにするために、「目のたんとある籠」を竿の先につけて立てておく。この籠を見た一つ目小僧は、目がたくさんあるので寄ることができず、帳面に付けることを諦めて行ってしまう、というのである。

事八日に厄神とか、疫病神などが去来すると伝えるところは、東北地方から関東地方に広がっていて、そうした負の存在を一つ目小僧とするところはおもに関東地方に分布する。この一つ目小僧は去来する性格を持つことから「訪れもの」の一つに位